

たかと思つたが浜通りの清津警察署が自爆したのだとの情報がいっぱひ。海水浴場の方では機銃や散発の小銃らしい。羅南の残留兵が上陸するソ連兵と交戦しているのだった。間もなくソ連兵が間近に来てゐるとの情報に私達は事務所書類やら印鑑など重要なものを裏の防空壕に移し入り口を土嚢で塞いだ。少し離れた機関区からは火の手が上がっていた。私達は演習用の焼夷弾を持ち出し点火し事務所を焼こうとした。

そして全員駅のほうへ引き揚げた。私達が終戦を知つたのは八月二十日の朝である。山中をさまよっていたので終戦の詔勅も知らずにいた。十九日白茂線の白岩駅に着き駅前の集會場に泊まり翌朝、日本の無条件降伏を知らされたのである。

それから大放浪の旅が続いた。金も売る物もない、畠の白菜や大根を盗み、かじりながら歩いて三十八度線を越えるまでは、一緒に歩いてゐた人とも散り散りとなりまた何人かの友人が野垂れ死にした。

ようやく三十八度線を突破し米軍に保護されて内地に帰ることになった。釜山で乗船するときは外国へ連行さ

れるなどの噂も流れたが幸い着いたところは博多であつた。船上から青い島山が見えたときは全員が甲板に集まり万歳万歳を連呼した。皆の顔は涙に濡れ、なかには号泣する者もいた。誰からともなく「君が代」の合唱が沸き起こつた。

捕虜、脱走、無一文、悲劇引揚者

沖繩県 前花 哲雄

昭和五年一月現役徴兵で小倉歩兵十四連隊に入営し、翌六年七月帰休満期で予備役編入となつた。不況で帰郷をやめ、熊本の巡查看守憲兵等受験塾に入所二か月勉強した。当時朝鮮総督府では毎月第三日曜日に巡查募集試験があつたので京城に行き受験した。不況で大学卒業者等多く千五百人中二十五人の合格で翌七年四月警察官拝命、講習後平安北道出向、鴨緑江岸国境警備勤務についた。昭和十五年任警部補、新義州警察に勤務し、同十八年平安南道出向、道警察部に勤務した。戦時中敵機は数

回来襲したが偵察であった。八月十五日終戦の詔勅を聞き、日本の無条件降伏はかつて世界にその例はなかったという。日本の植民地政策はその執行の大半が警察に係わりを持ち、住民に怨恨視され、殺害された者もあったので、どうなるかと心配し身辺に危険を感じていた。

八月十七、八日頃、ソ連軍尖兵は既に平壤に来襲、南下する満州日本軍將校団は下車を命ぜられ、三合里の日本兵舎捕虜収容所に詰め込まれた。爾後平壤以南の鉄道は運行されず、三十八度線は既にソ連軍によって設定通行を禁止された。平壤は朝鮮第二の大都市であった。私は平壤八千代町に住んでいたが、八月二十五日頃ソ連將校（中尉）が裏木扉を破壊して、抜き身の拳銃を突きつけてきた。身の危険を感じ室にいた妻と息子（三歳）を表玄関から逃がし、自分も逃げたら討たれると思い、両手で敵の右手を逆に捻ち上げて大声で「射つのか」と言ったら「手を放せ」と通訳が言っている。討たないと約束したら手を放すと云ったら、武器を持っているかを調べると言うので手を放した。箆筒、押入を捜したが何もないことが判り、平壤署に同行を命じられ平壤署で取

調べをうけた。キリスト教会地下室に行ったら日本軍將校參謀等十数人が取調べをうけていた。私も数日取調べを受けた後、三合里の捕虜収容所に収容された。周囲は鉄条網を張り電氣を通じていた。

十数日後日本軍將校団は出発を命じられ、各自の日本刀は名札を付けて出せと言って取り上げ、武装解除して元山から乗船日本に帰るとのことであったが、ナホトカ經由でシベリヤに送られたとのこと。ソ連は軍と警察は同一に扱い、下士官と警察官を一個列車編成して満州北間島の捕虜収容所に詰め込んだ。食糧も粗悪なコンスタージの粥の毎日で栄養失調、伝染病患者続発で死者が多かった。明けて一月三日はいよいよシベリヤ行きの貨物車に詰め込まれ、ナホトカへ向かうべく清津經由の予定で北鮮に逆戻りの途中、或る早曉水汲みの許可が出た折部下であった神原君と脱走を企て、機敏に脱走に成功して平壤に帰って来た。ところが平壤の家は既に建國委員が管理して一物も持ち出せず、妻も夜逃げして帰ったという。三合里で軍衣と引替えた一枚の服、無一文で二十一年六月博多上陸、熊本の妻の実家に帰り、妻と会っ

たが、沖繩は米軍占領で最後の引揚船LSTで帰らないと帰れないとのこと、妻を説得して同年十月八重山に引揚げた。

三女を失い、私は強制収容所へ

高知県 川澤 利幸

昭和七年といえば、上海で抗日運動が激化し、上海事変が勃発した年であり、北朝鮮では盗賊が鮮満国境にちよう梁し、治安をかく乱している時でもあった。

そのような状況で、私はその年の七月、北朝鮮の治安警備の任務に着くべく大志を抱いて渡鮮し、二十一歳で警察官になった。そして、北朝鮮のへき地で治安その他の警察任務についた。

鮮満国境は前述のような治安状況であったので、しばしば危険な場面にもそうぐうした。そして、二十七歳となり、妻を迎え、女の子四人をもうけたが、うち二人を病気で続けて亡くしたときは医者はいないへき地勤務の

悲哀を痛切に感じた。

終戦直前、北朝鮮の咸興から京城の総督府に連絡用務のため出張することになった。そして咸興駅でポツダム宣言受諾の終戦の詔勅を聞いたのである。その放送を境に、治安は一変し、日本人に険悪な状況となった。連絡用務を終え、帰路にいたが、ソ連兵が海上から元山(二十八線に位置)に上陸し、南朝鮮との交通を遮断してしまった。そのため、列車が動かなくなり、徒歩で降り着いた。途中、鮮人の保安隊に何度も検問を受け、危険な目にもあった。咸興ではソ連兵が大型トラックで倉庫や商店に乗りつけ、略奪をほいままにしており、また婦女子が襲われる等、敗戦のみじめさを見せつけられた。

二十年九月のある夜朝鮮人の保安隊が来て「日本に帰してやるから」と言って私はひとりトラックに乗せられ、他の同僚等とともに咸興の刑務所に収容され、ソ連兵の取り調べを受け、凶們、延吉、ハルビン、北安と転々と収容所を移動し、強制労働に従事させられた。その間、食事はほんのわずかしかあたらえられず、空腹のため、排水口にたまっている残飯を拾って食べたこともあった。